

2005. 12. 21

言葉の眼差し 2 ～ フォーレ「ピアノ四重奏曲第1番より第3楽章」

映像が、言葉をかき消してゆく。

映像が、音楽と言葉の間に割り込み、音楽を略奪してゆく。言葉と音楽は強引に引き裂かれてゆく。置き去りにされ、死を選ぶしかない言葉——。

音楽は、すでに言葉を見捨て、華やかな映像との結婚を望んでいるように思えてくる。ああ、もう詩は「うた」ではありえないのか。

映像の持つ力は、あらゆるものを蹂躪してゆく。その、あまりの強烈さに、僕は思わず目を閉じてしまう。

今はまだ、映像はたやすくコピーすることができる段階でしかない。だがもし、人間が、言葉を瞬時のうちに操り、あらゆる表現を可能にしているように、映像を「瞬時のうちに操り」、あらゆる表現を可能にすることができたとしたら。感情、理念、理論・・・、すべてを表現できたとしたら—— わずかな数式や記号を残して、文字や言葉はこの世から消える・・・。

映像も、音楽も、視覚、聴覚という人間の五感と対応している。しかし、言葉はどの五感とも直接対応していない。言葉は、人間自らが作り出した新たな感覚器官であったはず。しかし現在、言葉は、五感を直接刺激するために人間が作り出す様々なもの—— すなわち、映像、音源などの洪水によって、水没しようとしてはいないだろうか。

現在にあっても、言葉によって音楽を奏でる、という僕の試みは、既に絶望的なのだろうか・・・。

映像と音楽の、華やかな舞踏を、打ちひしがれた目で見つめる言葉—— その憧れに満ちた眼差しを、僕はどう直視して良いのかわからないでいる。

僕は、そんな「言葉」の隣で一生を終えるつもりでいる。

この楽章の、静かな愛情に満ち溢れた旋律は、そんな彼女のそばに居る僕を静かに包み、勇気付けてくれるのだ。